

未来にのこしたいわたしたちの学び舎



2025 9/19(金) ~ 10/18(土)

学び舎をのこしたい
あの日、運動会で
手渡したバトンのように
今、未来に
渡したい思い出がある
伝えたい記憶がある
ここで学んだこと
ここで起きたこと
あなたも一緒に
考えてみませんか？
大熊町の、もう一つの学び舎
“熊町小学校”

熊小がある。
これまでも、
これから。

会場
CREVA
おおくま
南側入り口周辺

時間
8:00 - 20:00
※初日は13:00～

[主催] (一社)大熊未来塾 おおくまふるさと塾 福島大学地域未来デザインセンター
[後援] 大熊町 大熊町教育委員会
[お問合せ] 大熊未来塾 (担当:義岡) mail: okuma.future@gmail.com tel: 080-1472-3763

開催趣旨

東日本大震災被災地などの各地で、災禍を後世に伝えるための遺構整備が行われています。今年度から、熊町小学校等の、大熊町の中間貯蔵施設内の遺構についても、その保存活用についての検討が始まります。私たちとしては遺構を、そのままの場所で解体せずに保存することに、大きな意味があると考えています。

中間貯蔵施設内にある熊町小学校校舎等の遺構は、人々のふるさとと日常生活を、唐突に奪った原子力災害の惨禍を示す学びの場です。また、様々な建物の解体が進む大熊町において、卒業生と地元町民にとって「ふるさとを感じられる唯一の場所」であるという声もあります。

卒業生にとって唯一無二の「学び舎」であり、また後世に原子力災害の惨禍を伝える貴重な「学び舎」でもある遺構について、その実物を保存する意味と利活用の方法を、ご覧いただいた皆さまとともに考えるため、今回のパネル展示を実施します。

熊町小学校卒業生や地域住民、震災学習のために訪問した福島大学生にとって、熊町小学校がどのような場所なのか、一人一人の言葉で表現しました。ぜひ、ゆっくりご観覧ください。

なお、本企画に携わってくださった関係者の皆様、「CREVAおおくま」での展示をご快諾いただき、また後援いただいた大熊町役場および同町教育委員会に、心より感謝申し上げます。

多くの方が熊町小学校の今後の保存活用について考える機会となれば幸いです。

〔主 催〕 (一社)大熊未来塾 おおくまふるさと塾 福島大学地域未来デザインセンター
〔後 援〕 大熊町 大熊町教育委員会

展示に至るまでの経緯

2025年度、大熊町が行う「中間貯蔵施設内遺構等保存活用検討」は、中間貯蔵施設区域内の遺構を調査し（現在、把握されている6施設は、ふれあいパークおおくま、熊町水産振興公社〔ヒラメ養殖場〕、サンライトおおくま、熊町児童館、熊町小学校〔体育館含む〕、熊町幼稚園）、特に活用可能性がある1件以上を調査して保存活用案を作成し、町民や有識者を集めた会議体によって合意形成を図ったうえ、保存活用方針を策定するというものです（※1）。

わたしたちは、今年4月に地元紙で報道されて初めて、大熊町として、熊町小学校等の遺構の保存活用の検討がはじまったことを知りました。そこで、主に熊町小学校の保存活用をテーマに、全4回のワークショップとシンポジウムを、7月に1回、9月に1回、10月に2回、開催することとしました（※2）。

そして、7月のワークショップの報告を大熊町に行った8月に「VR（バーチャルリアリティ）などの記録をのこし、解体することも保存である」という町からの説明を聞きました。これは結論ではなく、ひとつの選択肢として語られたことだと思いますが、私たちとしては遺構を、そのままの場所で解体せずに保存することに、大きな意味があると考えています。その意義を問い、皆さんと一緒に考えるため、今回の展示を実施するにいたりしました。

7月26日および9月6日に実施したワークショップでは、町民や町外の方たちから、熊町小学校の存在価値が次のように挙げられています。

ふるさとを思い出すことができる場所

震災前の町の面影が感じられない中、唯一帰ってきたと感じられる場所

原子力災害によって、突然日常が失われたことを感じられる場所

将来の子どもたちに原子力災害を伝えることができる場所

これらの価値は、現物が解体されずに当時のままの場所で保存されることで成立する「場所」としての価値であると私たちは考えます。

当然、その保存には困難もあります。中間貯蔵施設内の遺構は、帰還困難区域にあるため、滞在時間や年齢など、未だ立ち入りに制限があります。

しかし、熊町小学校等が原子力災害を後世に伝える貴重な遺構であることを考えると、この問題は熊町だけではなく、双葉郡または国全体で考えるべきことです。県外の方も含め、より多くの関心を高めることが求められていると感じています。

ぜひ、この展示をご覧になって、熊町小学校のこれからについて、ご家族やご友人など、周りの方と考える機会を皆さんもつくっていただけたらと思います。

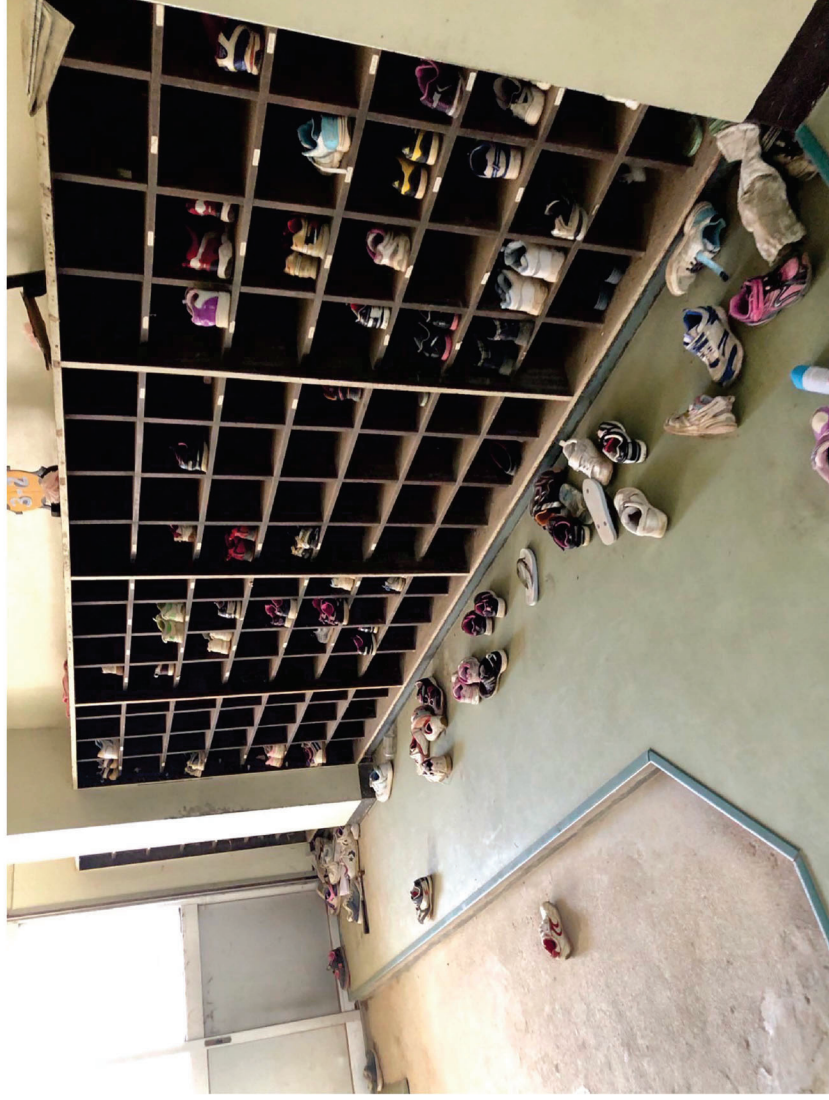
※1 中間貯蔵施設内遺構等保存活用検討支援業務仕様書(<https://www.town.okuma.fukushima.jp/uploaded/attachment/10296.pdf>)および同別表(<https://www.town.okuma.fukushima.jp/uploaded/attachment/10298.pdf>)より。

※2 大熊未来塾ホームページ(<https://okuma-future.jp/>)参照

voice

卒業生の声

当時小学6年生 T・Yさん



熊町小学校という建物をのこす意味については、私という一人の人間の中にさえ、さまざまな立場があります。今回、一人の卒業生という立場から伝えられることとして、これらの写真を選びました。大きな出来事の中では小さな出来事が埋もれてしまいがちです。私は母校に行くとき懐かしい気持ちになります。懐かしい気持ちになれる場所が、これからもあるといいなと素朴に思います。





大好きな学び舎。私がこの
学校で過ごせたのは4年生
のあの日まで。まだ使うはず
だったランドセル、体操着、
運動靴たちは思い出とともに
にあの日と同じ学校の中で
今でも私たちを待ってくれて
いる。楽しかった思い出。
果たせなかった約束。大人
になった私たち。何も変わら
ない校舎。でも今、また、
ここから、一緒に。

voice

卒業生の声

当時小学4年生 E・Rさん

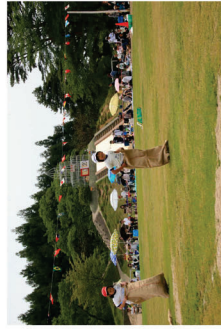


ここ集合!

voice

卒業生の声

当時小学4年生 S・Hさん

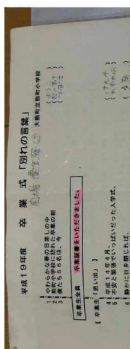
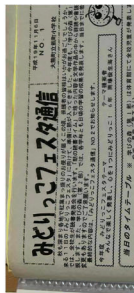
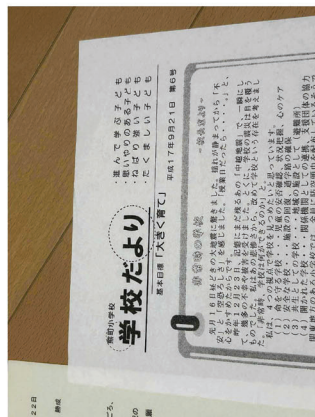


震度6強の地震から崩れずに
根を張りつづけてくれた
何年経っても私たちの帰りを
待ちつづけてくれた
お父さんでありお母さんでもある
大好きな熊町小学校
またみんなが集まれる場所でありますように、
みんなー!ここ集合!

voice

卒業生の声

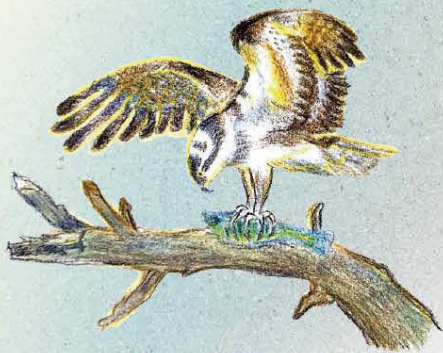
当時中学3年生 N・Yさん



母校だから。私が今、大熊町に帰ってきて、幸せに大熊ライフを送れているのは、熊町小学校に当時いた先生や児童、関係者を含め、熊町小学校の校舎や熊町城、校庭のアスレチックなどの様々な環境要因が、私という人間の基礎を育んでくれたおかげだと思っている。だからこそ、お世話になった場所が無くなってほしくないと思うのは私にとっては自然な感情なのである。

もちろん建物を残すにあたり、ランニングコストや修理費用はかかる。震災遺構として残すにしても、簡単にだれでも見に行ける場所ではない、などの複合的に重なる問題が残っているのも事実だ。この文章を見直しても「自分の母校だから無くなくてほしくない」という町民一人のエゴでしかないのも自覚している。こんなエゴのような内容を書いたら多くの人に批判されるだろうし、今までいろんなところで「熊小が残ってほしい」と素直な気持ちを吐き出すに、たびたびその思いを打ち砕かれそうなくらいにハードルが高いことを述べているのだと思い知らされてきた。

それでも残るかもしれないという可能性があるなら、批判的な意見を浴びせられる逆境のような状況は苦しいけれど、「熊町小学校が残ってほしい」という自分の気持ちに蓋をせず、その可能性を探る努力はしたいと思った。そのために、大熊町の未来の町民の方々の負担には絶対にしたくないし、「熊町小学校を先人たちが残してくれてよかった」と、思えるような場所として未来につなぎたい。



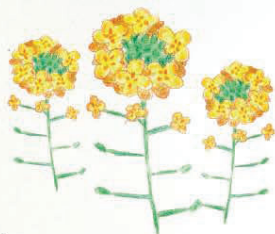
わたしたちは、
東日本大震災と原発事故の経験から、
防災・減災の啓発と、
社会の裏側で誰も犠牲にしない暮らしを
考える機会を提供しています。



フィールドワークでは、
熊町小学校をはじめとする
中間貯蔵施設区域にある遺構をめぐり、
町の記憶をたどります。



「遺構」を考えるとき、
地域の文化や自然、暮らしを
フィールドでまるごと保存することが
将来の地域づくりにも役立つと考えています。



未来のための大切な遺産として
次世代につなぐためには
どうすればいいのか
ともに考えていただきたいと思います。



大熊未来塾
Webサイトは
こちら



熊町小学校と、町の文化と歴史をたどる さまざまな遺構

海渡神社

お彼岸には日隠山に陽が沈む



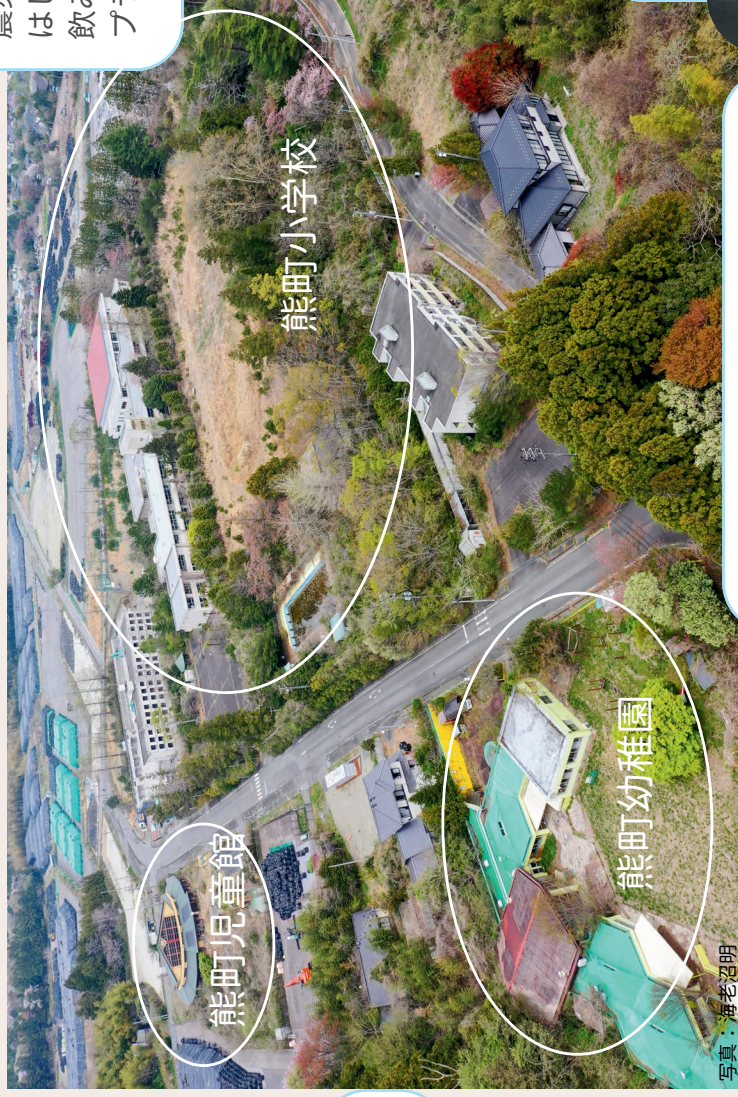
山神神社

地震で倒壊するも住民の想いで再建



稲荷神社と燃えた御神木

震災前、毎年恒例の冬の野焼きで燃えた御神木



熊町児童館

熊町小学校

熊町幼稚園

写真：海老沼明

熊町小学校 校庭

震災前からの名物
はしご(運てい)を
飲み込んだ
プラタナス



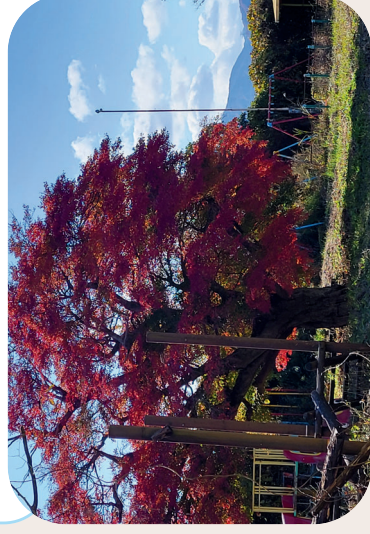
熊町小学校 1階教室

教室には震災当時の面影が残る



熊町幼稚園

樹齢132年におよぶ「おじさんもみじ」



遍照寺

ご住職の意向で存知保存



津波の被害や命の尊さを学ぶ 遺構の数々

なん松とミサゴ

津波から生き残った一本松の上で
2020年からミサゴが繁殖



キウイフルーツ

手入れができない状況でも旺盛な生命力

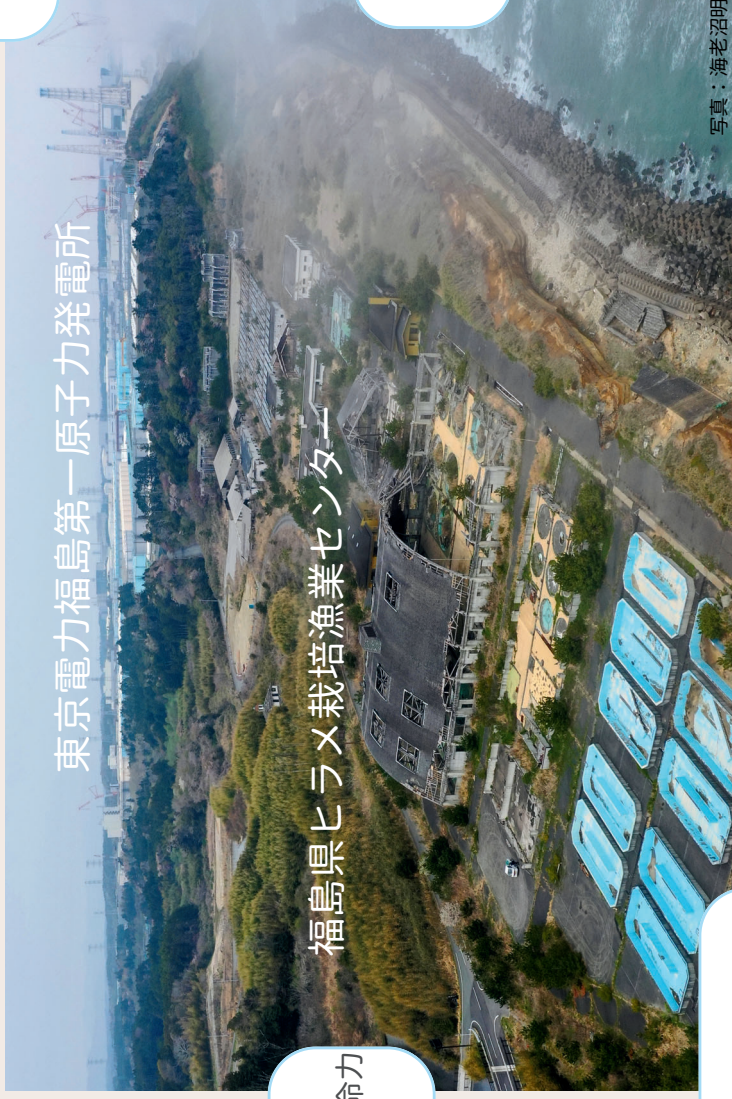


熊川区公民館と諏訪神社

津波に襲われたが奇跡的に犠牲者が出なかった
避難所。まさに鎮守の森。



東京電力福島第一原子力発電所



写真：海老沼明

福島県ヒラメ栽培漁業センター

福島県ヒラメ栽培漁業センター
命と防災を学ぶ慰霊の場



小入野橋

津波で倒壊するも小入野側北岸で保存



溺死精霊の墓碑

江戸時代末期の名もなき5人の船乗り



馬の背岬と旧防潮堤

熊川海水浴場の象徴である馬の背岬と
地震で倒壊した旧防潮堤



<4度引っ越しをしてきた学び舎>



現存する建物を眺めているだけでは見えてこない
時間的・空間的広がりの可能性が歴史を
辿るという営みのなかにはあるのではないだろうか。

← 熊町小学校の過去

過去を辿ることで見えてくるもの、それは今は目に見えない町の風景や人々の暮らしです。熊町小学校の立地の変遷を辿るだけでも、時代の動きや当時の町の変化が見えてきます。

歴史から考える 熊町小学校を残す意味

未来の歴史は、現在の積み重ねによってつくられます。
過去から築き上げられてきたもの、引き継がれてきたものも、
現在の積み重ねかた次第で、簡単に崩れてしまいます。
未来の歴史のために、現在（いま）なにができるでしょうか。

熊町小学校の未来（現在）————→

おおくまふるさと塾が作成した資料（引用文献：熊町小学校130周年記念誌、大熊町史）
をもとに、展示パネル（作：武内優）を制作しました。

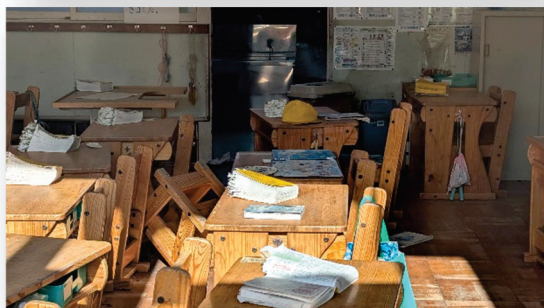


大熊町で聴き、語り継ぐ、東日本大震災と原発事故の記憶

大熊未来塾の代表理事の木村紀夫さんは、2011年3月11日に大熊町を襲った津波で、父と妻、次女の汐凧（ゆうな）さんを亡くしました。当時の自宅（現在は中間貯蔵施設内）の4キロほど北にあった福島第一原発の事故で捜索を阻まれ、汐凧さんの遺骨発見まで5年9ヶ月を要しました。木村さんはこのような自分の経験を伝えることで、津波と原発事故の犠牲になる人を無くし、また誰かに犠牲を強いる社会を変えることを目指しています。

このプロジェクト学修では、大熊未来塾と木村さんの活動に福島大学生が参加することを通して、福島を経験を伝える意義について考え、次に自分たちも伝える側になる「語り継ぎ」の活動に取り組んでいます。

遺構で木村さんの語りを聴き、その保存を考える



これまで2024年5月26日（21名参加）、2025年1月19日（27名参加）、6月9日（26名参加）の3回、中間貯蔵施設内の遺構を巡りながら、木村紀夫さんの震災伝承の語りを福島大学生と教職員が聴かせてもらいました。

今年の1月19日と6月9日の回には熊町小の保存についてのディスカッションもあわせて行い、その後のアンケートでは、「熊町小学校は震災遺構として保存すべきだと思う」という設問に「大変強く思った」と回答者46名中37名（1～5点で回答の5点、80%）が回答し、8名が「強く思った」（4点、17%）と回答しています。また参加者からは「熊町小学校を見て、まるでタイムスリップしたかのように感じて、当時の状況がはっきりと目に浮かんだ。これは貴重なものだと思うので残していくべきだと思う」「苦しくなるほど震災を自分事として考えることができる」等の意見がありました。

自分たちも伝える側になる、語り継ぎ活動

2024年9月11日と2025年1月19日に、計4名の福島大学生が木村さんの語りの一部を、他大学や同じ大学の大学生に「語り継ぐ」活動にチャレンジしました。木村さんの代わりに語るのですが、その際、自分の感想や、他の震災遺構や語り部の話を聞いた体験等も交え、単に木村さんの語りのコピーではない、自分たちの言葉で伝えるように心がけました。

取り組んだ学生からは「当事者の語りでないと伝わらないことも多いが、自分が感じたことを整理して伝えていくことも大切だと考えるようになった」「経験や記憶がなくても聞き手と同じ目線で話せるからこそ伝えられることや伝わりやすいことがあり、私たち学生が伝えることの意義について学ぶことができた」等の感想がありました。





熊町小学校校舎の保存を同校卒業生と考える



大熊町が中間貯蔵施設内の遺構の保存活用について検討する 2025 年度、その遺構を「語り継ぎ」活動の場としている協働プロジェクト学修「大熊町で聴き、語り継ぐ、東日本大震災と原発事故の記憶」では、同校卒業生の遠藤瞭さんを福島大学にお招きし、熊町小学校校舎の保存について、誰にとってどんな意義があるのかを考えるワークショップを、7 月 5 日（土）と 7 月 13 日（日）の 2 回、開催しました。

遠藤さんのお話—卒業生にとっての熊町小学校校舎の価値

ワークショップの最初に、遠藤さんから以下の内容についてお話いただきました。

- ・大熊町にあった図書館や商店街、文化センター等の「思い出の場所」の解体が進む状況
- ・熊町小 4 年生であった当時、東日本大震災に遭遇し、大熊町から転々と避難し、会津若松市に
- ・避難先に集まった同級生は約半数。2 年後大熊の中学校に進学したのはさらに半数
- ・2021 年 10 月の成人式は震災後初の大熊町での開催。福島大学が成人記念アルバムを作成
- ・避難先で通った学校は仮設校舎の場合もあり、熊町小の校舎は、自分が大熊町で育った証（あかし）になる貴重な建物
- ・復興とは「復興について考えなくなること」だと思うが、それは「もう思い出したくない」というネガティブな理由ではなく、今を楽しんで生きることができるというポジティブな理由によることが良い
- ・大熊町に思い出のあるものが何もなくなったというのは、禍根を残し、ネガティブな理由を増やす。思い出の場所である熊町小を残すことができたという経験は、ポジティブな理由になる

ワークショップ参加者が考えた熊町小校舎の価値

遠藤さんのお話の後、熊町小の価値等について考え、以下のような意見が出ました。まとめると、卒業生や大熊町民には「大熊町のコミュニティをつなぎ、継承する価値」、町外の人や未来の世代には「原発事故を感じ、同じことを繰り返さないよう継承する価値」が熊町小校舎にあると考えました。



- ・卒業生や大熊町民にとっては、事故前の町を思い出せる貴重な場
- ・大熊町民や町に関わりがあった人にとって、自分自身と町の繋がりを感じられる場
- ・震災当時を知らない人にとっては、かつてのことを想像したり、起こったことを考えたりする場
- ・未来の人にとっては、同じことを繰り返さない警鐘の場
- ・離れた・なくしたことで気づいた価値—当たり前が当たり前じゃないこと
- ・（熊町小にあるひとつひとつの物の）背後には一人一人の経験がある。残された日常の痕跡で、震災を知らない世代もそれを現実として捉えられる。記録だけでなく、記憶として伝えていくことができる。



協働プロジェクト学修参加者の声

「語り継ぎ」やワークショップの開催に取り組んできた、協働プロジェクト学修「大熊町で聴き、語り継ぐ、東日本大震災と原発事故の記憶」参加者に、熊町小校舎への思いを声にしてもらいました。

熊町小学校は大熊町民の心の拠り所となるだけでなく、大熊町民でない人たちにとっては東日本大震災が発生したときの混乱の様子を知ることができる貴重な場だと思います。帰宅困難区域内の建物が次々と取り壊される中、震災前の大熊町には多くの人が生活していたこと、そして震災の混乱の様子を当時の状態がほとんどそのまま残っている教室を目にして学ぶことができる熊町小学校は、後世に大熊町のことを伝える上で重要な存在なのではないでしょうか。

行政政策学類 3 年

熊町小学校は、震災と原発事故の記憶を次世代に伝える唯一無二の存在です。建物をそのまま残すことによって、当時そこで営まれていた生活や避難の実態を実感でき、震災・復興を自分事として捉えることができるという価値があると私は考えています。熊町小学校は、町民だけではなく、外部の人や震災を経験していない世代など、様々な立場の方と共に震災・復興を考える貴重な場となるのではないのでしょうか。

経済経営学類 2 年

私は実際に見学し、お話を聞いて熊町小は時間が止まったような様子で残されていたため、地域の人たちにとって故郷の思い出の場所であり、特異な原発の被害というものを後世の人々に伝えていくことができる施設になると感じた。ここの存在は町民や福島県民だけでなく、すべての人々が知るべきであるほどの価値があると思う。

経済経営学類 2 年

関りのなかった小学校や子どもたち、その家族と住民の方々。学校が残されることで、私たちは繋がり、時間を飛び越えて一緒に考えることができる。復興により町の姿が大きく変わっている大熊町なればこそ、失われた日常の姿や思い出をふり返し、共有する場が必要なのではないのでしょうか。地震や津波で破壊された校舎ではない熊町小は他に類のない場になると思います。

教員

熊町小では、原子力災害が無人の荒野で起きたのではなく、子どもたちが日常生活を営んでいた学校を、突如として襲ったことが一目で把握できます。そして熊町小が、そのままの場所に、そのままの姿で「ある」ことが、人の心を強く動かしします。また卒業生と大熊町民の中には、校舎の解体を、再びふるさとを奪われるように感じる人もいます。熊小校舎の解体は、そのような町民と未来世代への暴力になりかねません。熊小校舎を解体せず残し、保存することを強く望みます。

福島大学地域未来デザインセンター教員 藤室玲治

残して
便あう。

「なじよすっぺ」

「どうしようか？」

熊小についてのあなたの声を聞かせてください。

私達の思い出も
壊れるか？
大熊町に帰る理由
2025/10/16 熊小生

熊小小の
伝承は
有り得る

いかに
豊田中学校は
解体してしました
寂しい「つかない」
ことをして
しました
1/10/16 熊小生

だいたい
熊小
残してほしい

「もしも」
さら地になった
は悲しい。

新しく町が復興
していく中で
大熊町の日常が
壊れたという事実を
忘れないでほしい
です。2025.10/4

夫婦で
息子達と
一緒に
残したい

いつか
大熊町に
帰りたい

大熊小は
保存に
してほしい

みんな
一緒に
向かい
たい

向かい
たい
25/7/27

現場で見て
感じて
残してほしい

熊小小
緑化運動が
長年行われて
きた
2回受賞に
なりました

私達の
「大切な
思い出の地」
なくさないで下さい

残すべき
町として
歴史を
残すべき

残すことに
反対の
意見も
残してほしい。

完全に
同意見です。
2025.7.27

思い出の地でもあり、
震災の伝承としても
重要な小学校が残る
よう、住民の方々の声
を聞いてほしいと思い
ました。2025/10/4

Stories inspire
change! We
must learn
from the
past to create
a better future.

見て、聞いたことを
自分の中で考えて
それを伝えて
みんなが
残したい

残す
じょう

熊小小の
歴史を
残したい

何より
「物質性」が
重要!!
残したい

形として
残っている
こと
より価値を
実感できる

ビジュアル
デザイン
残したい

知って
残したい

残したい
心の原点
です

みんな
もっと
残したい

物質性
残したい

緑化
残したい

熊小小
残したい

親子三代で
熊小小
残したい

リアル
残したい

「形として」
残したい

現在
残したい

町の
あま
残したい

6年生の時
日曜に
残したい

ぜひ
残したい

原典
残したい

形ある
残したい

おとも
残したい

なくせば
うすれる
記憶

「 なじよすっぺ 」

「どうしようか？」

熊小についてのあなたの声を聞かせてください。

卒業生にとっても、
元保護者にとっても、
熊小の人々にとり
思いを寄せ合い、
過去と未来をつな
ぐ場です。

